

かないといった違いが生ずる。また日本南西部、東京湾以南に分布するものは、地中海、特にマルセイユのものと同アロメトリーをもつので、日本のムラサキガイはマルセイユから神戸港へと船に付着しながらもたらされたものだと結論づけた。

(2) 貝の個体群研究は貝の年齢がわからないと前に進まない。どうやって年齢を推定するかという問題で随分時間を費やした。ある時、貝殻をいじっていて、何気なしに太陽にかざしてみたところ、光の通るところと通らないところが、縞になって交互に存在する。光をよく通す部分は春に形成されたところで、光の通らない部分は秋に形成されていることをその後の研究を通じてつきとめた。光の通らない部分から通る部分へ移行する境界は、冬の生長停止のあったところだということがわかると、異なった年齢のものが集合している貝の個体群を年齢区分できるようになり、生長曲線や死亡曲線、生命表がつかれるようになった。

(3) ムラサキガイの生産力を計算した。この貝の生産力は生体重で1㎡当たり、3年間で151.9kgというものすごい値が出た。これはアメリカ・オハイオ州のトウモロコシ畑に匹敵する値である。この驚異的な値を私の論文で知ったFAO(国連食糧農業機関)は私に論文を請求し、それをFAOの機関誌に転載してくれた。世界の蛋白食糧の確保に実に都合のいい生物だということが科学的に証明されたわけである。発見はその他二、三あるが割愛する。

研究を始めた頃は、これまでの生態学の理論を書き直さなければならぬほどの法則を見つけてやろうと意気込んで取り組んだが、30年を経て、平凡な結論をいくつか得たにすぎないので、そのことは残念である。研究の必要上、他の研究者の論文も2千篇以上読んだが、吉良竜夫先生の最終収量一定の法則を証明した論文をのぞけば、西欧のものも北米から出たものも、びっくりするような論文は一つもなかった。どの論文も平凡で似たり寄ったりで、最近では本当に独創的な仕事というのはどこをつけば出てくるのだろうかといつも考えている。

本は好評の内に2千冊がすぐ売り切れた。私の本の中にルイセンコからの引用があったものだから、京大の院生連中が度胆を抜かれるほどびっくりしたという後日談もある。本は生態学者以外にも、冷却水の取り入れでムラサキガイが水路に定着して困っている各電力会社、製鉄所といった大企業の研究者の人達が私を呼んでくれて話しをすることで、本の出版後の一時期は引っ張りまわされたが、自分の研究も思わぬところで役立てられるのは嬉しかった。そしてこの本の出版をもってムラサキガイの研究には終止符を打った。

この本の出版後は3年間かけて、英文で『水生動物の

年齢査定と生長』という本を書き上げた。これはいわば、ムラサキガイの年齢査定をサンゴやウニ、ゴカイや魚にまで拡大したような仕事で、数多くの動物のグループについて、どうすれば年齢を知ることができるかを書いた本である。この本を書くためにも世界中からかき集めた論文2千篇を読み、重要な部分をカードにタイプして書き上げた。

昨年、インドのコーチン大学に講義のため行った時、本原稿を3冊持って行った。私の本原稿を見たコーチン大学のモハンダス教授が「この原稿で学位が取れる。学位取得のために教授会に提出してはどうか」と言って下さったので、原稿を教授に預けた。すべてはモハンダス教授と私の友人のモハメド・サリー助教授が万事うまくやってくれた。教授会に対して本の内容の説明をすることが求められ、2時間ほどかけて説明した。そしてあとは日本に帰って成り行きに任せていたら、今年(1996年)の1月の終わり頃、モハンダス教授から手紙が来て、教授会で私に対する学位授与が正式に決定されたことを伝えてきた。しかし、ムラサキガイの研究でとれなかった学位を、あっさり書いた本で取得しても、私の気持ちは複雑である。小学校1年生の子が運動会で走ってビリになったのに、参加賞として鉛筆を1本もらったような気分である。私の研究は30年間失敗続きだった。30年間の長い長いマラソンであった。30年間あれほどまでも苦しみながら研究を続けて得たものは何だったのだろうか。英語が話せて書けるようになったこと、統計学や微分方程式が解けるようになったこと位であろうか。

ここまで書いたきて、私は「七人の侍」という映画の一場面を思い出している。強盗が赤ん坊を人質にとって物置小屋へ逃げ込んだ。村人は初老の侍に助けをくれと願う。侍は旅の僧に化けて、小屋の入口から強盗に向かってにぎりめしを放ってやる。腹の空いた強盗がにぎりめしに気を取られている隙をついて、侍は強盗を一突きでしとめる。それを見ていた若い侍が「どうかあなたの弟子にして下さい」と初老の侍に願い出る。初老の男は若い侍に向かってこう言う。「自分も若いときは一国一城の主を夢見て戦に挑んだが、どの戦も負け戦になった。気がついてみると髪の色がこんなに白くなった。自分は供を連れて歩けるような身分ではない。そんな不運な男について来るのは止せ」と。

私の研究は失敗に失敗を重ねた。しかし私は研究者であった。(ほそみ あきみち)